

～はぐくみコース～ <はぐくみ賞 5団体>

■ 子どもの生活支援ネットワーク こ・はうす（和歌山）／10万円

「地域の子どもたちを地域で支えるためのボランティア養成研修」

団体概要	ファミリーサポートセンター相談委員、つどいの広場事業スタッフ、障がい者の生活支援ワーカー、大学教員が集まり、子育て世帯の実態について交流する中で、学習と生活を一体的に支援する事業の必要性を感じ、2015年1月より毎週木曜日に和歌山市内の民家にて「無料学習支援とみんなでごはんの会」事業を始めた。対象は経済的事情や親の病気・長時間労働等により、支援を必要としている小中学生。
事業概要	地域の小中学生を対象とした無料学習支援と夕食提供事業の利用希望の増加にともない、活動日と場所の拡大が課題となっている。本事業では、市民・学生を対象に子どもの貧困問題や子ども支援のあり方について学ぶ機会を設けることで、理解を深めるとともにボランティアの養成を行う。
講評	「子ども食堂・学習支援」の取り組みは全国的には急速に増えているが、和歌山市では初めての団体であり、今後の和歌山での当該活動の先駆的役割を果たすことの期待を込めて「社会性」「効果と発展性」を評価した。また、この間の取り組みから利用希望者が増えてきたことへの対応から、ボランティアの養成を行うことは、「実現性」「資金計画の妥当性」からも評価できる。

■ 特定非営利活動法人 小児救急医療サポートネットワーク（大阪）／10万円

「小児診療機関の電話対応研修事業 ～家庭力育成は、声を聴くことから始めよう～」

団体概要	2004年より大阪府小児救急電話相談が開設され、連日夜間12時間の電話相談を続けている。設立趣旨は、家庭における養育力が低下し、子どもが軽症でも夜間救急を受診する例が増えたため、保護者の自立と啓発の重要性を鑑みてである。しかし、単なる電話相談だけでは、子育て支援の考え方を反映させた保護者への幅広い啓発活動は難しいため、医療関係の相談員を会員としてNPO法人を設立した。
事業概要	子育て経験の乏しさ等から、子どもが病気の際に受診の判断や家庭での過ごし方に戸惑う保護者が多い。電話は直に医療機関につながる手段であるが、相談員による安易な受診勧奨傾向があり、親の養育力を損なうことにもなっている。また、医療機関側も電話対応を苦手とする看護師や事務職は多いことから、本事業では、小児科の子育て支援としての医療関係者への電話対応研修を展開する。
講評	本事業は、医療関係者の職種や、医療と教育福祉などの縦割りを超えるネットワークをつくり、子育てをする保護者の啓発支援を進めるものであり、「社会性」と「新規チャレンジ性」が評価された。また、医療と家庭の繋がりの問題点に着目し、専門性を活かした子どもの見守り支援は「先進性」も評価でき、はぐくみ賞の助成主旨とも合致した、本アワードに相応しい事業であると言える。

■ 特定非営利活動法人 しんぐるふれんず（大阪）／10万円

「ひとり親家庭とステップファミリーの交流BBQイベント」

団体概要	<p>多くのひとり親家庭は、日々の生活の中で収入と家計の悩み、住居・教育・躰・食事・栄養についての悩みや不安等を抱えており、かつ、有効な情報収集手段を有しているとは限らない。同じような境遇にある仲間が、経験と共感をもって寄り添い、交流と学習を通じ、子どもたちの教育・育成を支援することを目的として設立された。</p>
事業概要	<p>「ステップファミリー（子連れ再婚家庭）」は「ひとり親」とは違った視点から、「ひとり親家庭」の悩みに示唆を与えることができる。本事業では、年3回のイベントを通じて、「ひとり親家庭」と「ステップファミリー」の交流の中から、ひとり親家庭の子育てでの孤独感をなくし、子どもたち相互の交流を図ることを目的とする。</p>
講評	<p>「ひとり親家庭」の交流の中から子どもたちの教育・育成を支援する本事業は、ひとり親家庭の子育ての問題に主体的に切り込んでいこうとしている「社会性」「市民主体性」が評価された。</p> <p>はぐくみ賞は小規模な団体への応援を目的としたものであり、これからも地域で長く継続し、活動の広がり期待したい。</p>

■ スノーキャンパス（奈良）／10万円

「今までとちょっと違う絵本の読み方・楽しみ方」

団体概要	<p>橿原市を中心とした障がいを持つ子どもの保護者が、障がいを持つ子どもとその兄弟を対象とした遊び場づくりを目的に 2014 年に設したボランティアグループ。</p> <p>主な活動は、①おもちゃ図書館ゆめロケットの開催、②えほんの広場の開催、③保護者勉強会（制度のこと、発達障がい児の育て方など）を行っている。</p>
事業概要	<p>一般的な絵本の「読み聞かせ」では、障がいを持つ子どもの多くは集中することも、じっとすることも苦手だと言われる。そこで、本事業では、ダンボール製面展台に絵本を並べ、子どもたちが選びやすい環境を整えた「絵本の広場」を設け、読みたい絵本を手に取り、読み合う「広場読み」を実践できる人材を育成し、障がいのある子もない子も、絵本を通して共に楽しめる機会を増やすことを目的とする。</p>
講評	<p>障がいのある子もない子も、絵本でコミュニケーションを取り育ち合う機会をつくる本事業は、「広場読み」という創意工夫で「もう一つのスタンダード」をつくって行こうという「社会性」「新規チャレンジ性」が高く評価された。また、広く参加を募るなど「効果・発展性」「共感と市民参加」の面からも評価された。</p> <p>本アワードの助成によって、今後のさらなる活躍・継続を期待したい。</p>

■ さくらい読書会「子ども読未知」(奈良) / 5万円

「子ども読未知『おじいちゃん きいてよ プロジェクト』」

団体概要	2009年より、桜井市の子育て世代の母親を中心に、本を通して子どもと大人のつながりを築くことを目的に、読み聞かせを行うボランティア団体として設立した。主な活動は、「絵本と音楽のコラボレーションコンサート」の実施、桜井市内小学校で「平和学習」の読み聞かせの実施などである。
事業概要	夏休み期間中、一般公募の小学生が事前に絵本の読み方を練習し、高齢者施設のおじいちゃんおばあちゃんに読み聞かせに出向く。小学生のボランティア体験と夏休みの思い出づくりと多世代交流が目的。子どもたちは、おじいちゃんおばあちゃんに喜ばれること、必要とされることを通し、ボランティアの意味を知ることができる。
講評	親や祖父母世代が子どもに本を読み聞かせる活動はよくあるが、当団体の活動がユニークなのは、子どもたちがおじいちゃんおばあちゃんに読み聞かせをし、喜ばれ、必要とされることを通して成長することを目的としている点である。そうした「創意工夫性」や、小さなサークル活動として7年間の活動の積み上げがあることから、「市民主体性」が評価された。はぐくみ賞の助成を機に、さらなる活動の継続・発展を期待したい。

(助成金額・50音順)